江戸の鼓動「お囃子」

江戸囃子の起源について確実な史料は多くありませんが、一説には享保（1716～36）の初め頃、現在の葛飾区にあたる葛西地域で、香取明神の神主・能勢環が五穀豊穣を祈って創始した神楽囃子が始まりとされています。

当初は、和歌に合わせて作られたことから「和歌囃子」とも呼ばれ、やがて近隣の祭礼で演奏されるようになり、農村の若者たちの間にも広まっていきました。

18 世紀中頃になると、この葛西囃子は江戸の町にも入り、神田明神祭礼や山王祭といった天下祭で演奏されるようになります。
山車や屋台の上で奏でられる囃子は人々の耳目を集め、江戸の町を中心に大流行していきました。

当時の記録には、「夜になると若者たちが集まり、囃子を稽古する音が町に響いていた」といった様子も記されており、囃子が生活の一部となっていたことがうかがえます。

江戸後期になると、祭囃子は神楽師などの専門家だけでなく、町人たち自身が担うようになります。
その中で、葛西囃子を基礎としつつ、江戸・神田の地で整理・洗練されたものが神田囃子として形づくられていきました。

明治時代以降は、家元制度によって技と曲目が受け継がれ、昭和に入ってからは保存会が結成されます。

そして昭和 28 年（1953）、神田囃子は「江戸の祭囃子」として東京都指定無形民俗文化財となりました。

お囃子は、楽譜ではなく耳と体で覚える芸能です。
音を聴き、動きを見て、体で覚える。そうした口伝によって、江戸から現代まで受け継がれてきました。

江戸囃子の系譜は、静岡、千葉、埼玉など各地の祭囃子へも広がり、江戸の祭礼文化が地域ごとに根づいていったことを今に伝えています。

出典：千代田区教育委員会,続・江戸型山車のゆくえ～天下祭及び祭礼文化伝播に関する調査・研究報告書～,1999 年,P173-174